

大分県におけるダークツーリズム： Darktourism in Oita

一 戸 信 哉

はじめに

本稿は、「ダークツーリズム」の観点から、九州観光の可能性を分析する研究の一環として、大分を採り上げる。九州は、「明治以降、今に至るまで、近代化のツケを払わされてきた」¹⁾とされる。西南戦争に始まり、「特攻基地」などの戦争遺構の存在、さらには長崎の原爆まで含めてとらえると、「戦争」の側面から見た、ダークツーリズム遺構の多さが目立つ。太平洋戦争末期には、沖縄戦の戦局が厳しさを増す中で、次の米軍の上陸地として予想される九州は、「本土拠点」としての位置づけが明確になっていった。その結果、鹿児島県を始めとする南九州には、南九州市にある知覧特攻平和会館を始めとして、多くの戦争遺構が残されている²⁾。

井出明は、著書『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』（幻冬舎新書、2018年）の中で、九州の中でも主として熊本に焦点を当てて、水俣病、ハンセン病、炭鉱問題をあげている。これらもまた、近代化の中で生まれてきた課題であり、熊本を中心にその遺構が多く残されている。

本稿は2018年12月及び2020年2月に実施した、大分県及び長崎県でのダークツーリズムに関する調査のうち、大分県に焦点を当てるものである。両県は、戦国時代からキリスト教を積極的に受け入れた地域であり、その点を現在も観光PRの中で積極的にアピールしているという点で、共通する。また、福岡市への人口集中が進む中で、両県は現状、九州新幹線のルートから外れている点も共通している。

ただし長崎県は「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に選ばれる過程において、ダークツーリズムの手法をどのように取り入れるか、多くの試練を経験している。長崎県については、先行研究を踏まえつつ、今後検討を試みるとして、今回は大分県に焦点を当てて検討を行う。

1. 大分観光におけるICT利用とダークツーリズム

大分県は、「日本一のおんせん県 おおいた温泉味力も満載」をキャッチフレーズとする「大分県ツーリズム戦略」を2012年に発表した。その後も「おんせん県」をキャッチフレーズにする戦略を取り続けており、現在は「日本一のおんせん県おおいたツーリズム戦略（2019-2021）」の実施期間にある³⁾。

この中で、情報発信の領域については、「情報発信とブランド力の向上」が、5つの戦略の1つに掲げられており、具体的な施策として、「おんせん県おおいたのブランド力の向上」「効果的な情報発信」が挙げられている。ICTを利用した施策の具体案としては、「WEBやSNS等を活用した情報発信による「おんせん県おおいた」ブランドイメージの向上」「留学生や大学生等からのSNSによる効果的な情報発信」「観光客がSNSによる情報発信に取り組める仕掛けづくり」「SNSや旅行情報サイトを活用した情報発信による個人旅行客の誘客」などが挙げられている。インバウンドの堅調な増加が続く状況で作られたこの計画は、コロナ禍でさまざまな見直しを迫られているものと予想されるが、「ダークツーリズム」のような「悲しみをめぐる旅」、あるいは、個人が自ら調べて県内各地の遺構をめぐる、とりわけ大分県民自身がそのような活動を行うことを想定した取り組みは見られるか。「戦略1 地域の観光素材磨き」の中で、「ユネスコエコパークに登録された祖母・傾・大崩（おおくえ）山系」「日本ジオパークに認定された姫島と豊後大野」「宇佐神宮や六郷満山などの歴史・文化資源」といった言及は見られるが、「戦争」や「災害」に関する遺構についてはほぼ言及が見られない。

今回の調査では、戦争・災害など、近代が生み出した「悲しみ」にふれるものだけでなく、キリシタン大名大友宗麟によるキリスト教の布教許可及びその後の「殉教」なども加えて、大分のツーリズム戦略には現れない、少なくとも大きく扱われていない内容について、その現状を記述しつつ分析する。

2. 大分市：大友宗麟と西洋文化の観光における位置づけ

大分県は「おんせん県」を宣言し、別府、由布院など各地の温泉を観光の目玉に据えているが、大分市内に限ってはやや事情が異なる。もちろん、大分市内から別府まで電車で10分程度と、別府温泉へのアクセスも容易であり、決して大分市が「おんせん県」と文脈を共有していないわけではない。ただ大分駅前にある銅像、さらにその周辺の記念碑を見る限り、キリシタンの大友宗麟、宣教師ザビエルが主要なアピールとなっているように見受けられる。

大分駅前に大きな存在感で銅像が設置（写真1）されている大友宗麟は、豊後を拠点に北部九州一帯を支配した戦国大名であり、キリスト教に改宗したキリシタン大名として知られている。1551年ころ、フランシスコ・ザビエルを府内（現在の太宰府）に招聘し、キリスト教の布教を許可、ポルトガル国王への親書を渡したとされる。17世紀ファン・ダイクが描いた「St. Francis Xavier before Otomo Sorin, Daimyo of Bungo（豊後大名大友宗麟に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル）」が、大分市内の展示でたびたび紹介されている。宗麟が布教を許可した後、府内に宣教師が滞在して宣教を行うとともに、教会や病院、宣教師を育成するコレジオなどが設置され、宗麟自身もキリスト教に改宗している。

大分駅前の北口駅前広場には、大友宗麟像と並んで、フランシスコ・ザビエルの銅像（写真2）、かつての世界地図で九州に「Bungo」（豊後）の文字が刻まれたことを示す床陶板⁴が設置されている。さらに大分市では、2013年に「南蛮文化発祥都市宣言」を発表しており、その宣言の内容を銅像の下に掲示している。宣言の中では、「新しい歴史の扉を次々と拓いていった宗麟公の進取・開明の気風に学び、その偉業と歴史遺産」を次世代に伝えていくとしている⁵。



写真1：大分駅前の大友宗麟像（筆者撮影）



写真2：大分駅前のザビエル像（筆者撮影）

2- 1. 遊歩公園の南蛮文化関連彫刻

大分市内中心部、府内城跡から大分駅方面に延びる道に沿って設置されている「遊歩公園」には、豊後における西洋文化の受容に関する彫刻がいくつも設置されている。おおむね1970年代に制作されたものである。西洋文化の「本格的な」受容というのは、通常明治維新前後に起きたと考えられるが、この公園の中では、16世紀に大分で受け入れられたという点が強調されている。さらにいえば、この受容に「発祥」という表現を用いている点も注目される。通常の語感からすれば「発祥」というよりは「伝来」ではないかと考えられるが、以下に写真とともに紹介したい。

A. 西洋音楽発祥記念像（写真3）

16世紀の府内では、宣教師による音楽教育が行われたとされ、宣教師から教育を受けた少年たちが大友宗麟の前でピオラを演奏したとされている。これを「西洋音楽の発祥」ととらえ、宣教師から音楽を習って合唱している少年たちの姿が描かれている。



写真3：西洋音楽発祥記念像（筆者撮影）

B. 西洋劇発祥記念像（写真4）

1560年のクリスマスに、日本で初めて西洋劇が行われたとして、その様子を伝える像である。



写真4：西洋劇発祥記念像（筆者撮影）

C. 西洋医学発祥記念像（写真5）

1557年にポルトガル人医師ルイス・デ・アルメイダが、府内に西洋式の病院を開設したとされている。この像は、アルメイダが外科手術をしている様子を表している。



写真5：西洋医学発祥記念像（筆者撮影）

このほか、天正遣欧使節としてローマ教皇に謁見した伊東ドンマンショやフランシスコ・ザビエルの像（駅前広場のものとは別）が設置されている。大友宗麟の先見性により、最新の西洋文化が輸入された町、大分、という点が強調されているように思える。

大友家の統治による繁栄は長くは続かず、1593年文禄の役での失敗のため、第22代大友義統のときに豊臣秀吉により改易となっている。府内でのキリスト教信仰は、江戸幕府の弾圧強化の中で衰退していったと考えられており、同時にこの西洋文化の継承も途絶えたものと考えられる。

2-2. 殉教公園

大分における、西洋文化受容を「光」として扱っているのが、大分市中心部の遊歩公園であるとすれば、その「影」の側面を扱っているのが、市内葛木にある殉教公園である⁶⁾。大分県キリシタン殉教記念公園という名前で、通りから看板と十字架が見える。道路の標識は「キリシタン公園」、バス停は「殉教公園前」となっており、表記に一貫性はなかった。

葛木は、禁教後も多くのキリシタンが住んでいた地域で、「獄門原」とも呼ばれ、92名の殉教者を出している。公園の中には、厳しい取り締まりを受けるキリシタンの人々の姿を表す彫刻（写真6）と、「大分県キリシタン殉教記念碑の由来」の書かれた石碑がなら

んでいる。彫刻は、遊歩公園の伊藤ドンマンシヨ像を制作した、北村西望が担当しており、昭和45年、1970年6月に建てられている。



写真6：殉教記念公園の彫刻（筆者撮影）

大友宗麟によるキリスト教や西洋文化の受け入れは、寺社破壊などの負の側面があったとされるが、今日の大分県、少なくとも大分市の文脈では、「豊後」「府内」に繁栄をもたらした英雄としての扱いが表に出ている。大分市の「南蛮文化発祥都市宣言」は、それが典型的に現れた例とっていいだろう。他方、1970年代に市内に建てられた遊歩公園や殉教公園の様子を見る限り、「光」と「影」の両面の存在が、それぞれ強調されており、ここに1970年代の大分の人々のバランス感覚を見てとることもできそうだ。

3. 日出町：大神訓練基地の整備

日出町（ひじちょう）は、大分市内から25キロ、大分市から見て別府湾を挟んで北側の町で、現在は大分市や別府市へのベッドタウンとなっている。この町には、1945年に人間魚雷「回天」の訓練基地、大神訓練基地が設置され、大神突撃隊が編成された。大神突撃隊は、出撃する機会のないまま、1945年8月15日の終戦を迎えている。

現在基地のあった場所は、回天大神訓練基地記念公園⁷⁾として整備され、回天の実物大模型や魚雷調整プール跡が展示されている。公園内には、駐車場、公衆トイレなども整備されている。ただし、公共交通機関でのアクセスは難しい。



写真7：回天大神訓練基地記念公園の銅像（筆者撮影）

公園横の小山には、格納庫と思われる横穴が残され、山の上には回天神社が設けられている。神社の敷地内にも、回天の模型が設置されている。

2018年12月に筆者が訪問した際には、雨が降っていたこともあり、他の訪問者には遭遇しなかった。駐車場やトイレなどが整備され現地の環境は整ったが、観光客への周知や公共交通でのアクセス整備など課題は多い。「回天」関係者による慰霊祭などは定期的に続いていくにせよ、次世代の関心を高める工夫が求められる。

最初に回天の訓練基地となった、山口県周南市の大津島には、回天記念館がある。大津島にはフェリーで渡る必要があり、日出町とは別のアクセスの課題がある。両者の比較検討については、今後の課題とするが、時間の経過とともに低下する、戦争遺跡への関心をどう高めるか、いずれの施設においても課題があるといっていよう⁸⁾。

日出殉教公園・日出藩成敗場跡地

2回の訪問、いずれでも訪れることができなかったが、日出町にも殉教公園がある。この場所は旧日出藩の処刑場であったため、家老職にあったキリシタン加賀山半左衛門が5歳の息子とともに処刑された場所でもあったと考えられている。のちに、カトリック大分教区によって、殉教公園として整備されている⁹⁾。

4. 竹田市：「隠れキリシタン」と殉空の碑

竹田市は、大分市内からJRで60-70分、大分県南西部熊本県・宮崎県と県境を接する人口26,000人ほどの街である。竹田市の観光情報サイト「タケタン!!」¹⁰⁾では、竹田の観光のメインは、石垣の美しさを誇る岡城跡、大分県と宮崎県にまたがる「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」、「隠れキリシタン」に関連する遺構が大きく扱われている。このうち、今回の調査で訪問したのは「隠れキリシタン」に関する遺構である。

一方、観光情報で大きく扱われていない遺構としては、日露戦争で戦死した廣瀬武夫を祀る「廣瀬神社」および附属施設、西南戦争で殉職した藤丸警部慰霊碑、B29墜落の地に設置された「殉空の碑」が挙げられる。

長崎の場合には、大浦天主堂での信徒発見、浦上四番崩れといった経緯を経て、独自の「カクレ」信仰を守りつづけた人とカトリックに回帰した人の間に、地域社会で溝ができるなど、禁教期を経たが上に残された多くの問題があるとされる。それらに対する外部からの接近も容易ではなく、時がすぎるうちに過疎化・高齢化によってコミュニティの存続が危機的な状況を迎えているケースもあるという。こうした状況そのものが、近代の悲しみをめぐる「ダークツーリズム」の要素を含んでいる。

これに対して、竹田の場合には、禁教期にも比較的穏便にキリスト教徒への管理は行わ

れたとされており、禁教が解けたあとの遺構もほとんどない。長崎の世界遺産登録に際しては、当初「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として暫定登録リストに掲載されたのち、国際記念物遺跡会議（ICOMOS、イコモス）によって、禁教期の歴史的遺産に焦点を当てた再構成を求められて、構成遺産の見直しやストーリーの変更を行っている¹¹⁾が、竹田の場合に、こうした構成が可能なのか、さらに検討が必要になるだろう。

竹田のキリシタン関連遺跡のうち、唯一大分県の指定遺跡となっているのが、キリシタン洞窟礼拝堂である¹²⁾。この礼拝堂は、武家屋敷の並ぶエリアの奥の凝灰岩を削って作られたもので、奥の壁に祭壇がしつらえられている。ルオン・パジェス「日本切支丹宗門史」の中で、洞窟に隠れていた神父のことを伝える記述があり、さらにそれを匿った「シンガ」についての記述もある。シンガとは、前の領主志賀氏のことを言っているのではないかという解釈も散見される¹³⁾。当時領主であった中川氏もまた、キリスト教を密かに保護していたと見られており、実際には中川氏が保護していた可能性があるという。



写真8：キリシタン洞窟礼拝堂（筆者撮影）

市内中心部にある竹田キリシタン研究所・資料館は、観光ボランティアガイドの拠点となるなど、観光案内所としての側面も有している。中には、岡城の地下に眠っていたとされるサンチャゴの鐘のレプリカなど関連の資料が展示されている。

4- 1. 西南戦争で殉職した藤丸警部像

竹田市中心部を流れる稲葉川のほど近く、西光寺の敷地内に、藤丸警部像が設置されている。大分出身の彫刻家、朝倉文夫の作品である。藤丸宗造警部は、白杵市出身の警察官で、西南戦争で政府軍に加わって任務にあたる中で、西郷軍にとらえられ、西郷軍に従軍することを拒んだために、稲葉川河畔で処刑されたとされている。西南戦争の際、竹田は豊後方面での激戦地の一つとなり、「茶屋の辻の戦い」では、1,000人の死者を出したとされている。

竹田の士族の中には、竹田報国隊を編成し西郷軍に加わるものも現れ、また実際には一時竹田は西郷軍に占拠されている。報国隊に加わることを西郷軍が士族



写真9：藤丸警部像（筆者撮影）

たちに強く求めたという記録もあり、竹田が混乱に陥っていたことは想像に難くない。

稲葉川河畔には、「藤丸警部殉職之地」と書かれた小さな石碑が建てられている¹⁴⁾。

4- 2. 広瀬神社・広瀬武夫記念館

広瀬神社は、日露戦争の旅順口閉塞作戦に参加して、1904年に戦死した、竹田市出身の軍人広瀬武夫を祀る神社である。創建は、広瀬の死後30年を経た、1935年(昭和10年)である。かつて軍神として全国的に人気のあった広瀬武夫を「郷土の英雄」として祀った神社といってよいだろう。

神社の入口には、広瀬の立像が建てられている。広瀬武夫の立像は、かつて東京万世橋駅前にも建てられていて、当時は誰もが知る万世橋のランドマークであった。しかし、GHQの指示に基づいて東京都が撤去し、現在その痕跡は残っていない。

竹田の広瀬神社の敷地の中には、広瀬武夫記念館が設置されていて、広瀬武夫にまつわる様々な資料を閲覧することができる。ロシア時代の写真や遺品のサモワールなどの展示もあり、ロシア通であった広瀬の一端を知ることができる。

この神社には、もうひとり、竹田を本籍地とする軍人阿南惟幾の顕彰碑も設置され、広瀬武夫記念館にも「阿南惟幾記念館」の看板が並置されている。阿南は、太平洋戦争終戦時の陸軍大臣で、ポツダム宣言受諾の際には陸軍を代表する形で本土決戦を主張したが、最終的には降伏が決断され、本人は8月15日に割腹自殺している。阿南についても、敷地内に胸像と顕彰碑が建てられているほか、記念館の中に資料が展示されている。

いずれも高潔な人格と評される軍人であり、それぞれに壮絶な最期を遂げた人物である点も共通している。

4- 3. 殉空の碑 B29 墜落の地

県境の町竹田では、太平洋戦争末期、B29が墜落し、その後生体解剖事件という不幸な出来事に結びついた、その「現場」が残っている。1945年5月5日、熊本県の上空で米軍のB29と日本軍の戦闘機紫電改が空中戦となり、紫電改が体当りした結果、米軍機は墜落する。紫電改に乗っていた粕谷欣三海軍一等飛行兵曹は死亡したが、米兵はパラシュート脱出、熊本県と大分県にそれぞれに着地した。熊本側に逃れた兵士のうち、3人が村人に殺され、あるいは自決するなどして、死亡している¹⁵⁾。

現在の竹田市平田には、B29の機体が墜落、4名がパラシュートで降り立った。このうち、上官であるワトキンズ大尉のみが東京に送られ、他の3名は福岡の西部軍司令部に送られている。このあと、熊本での生き残り2名と大分の3名に対しては、九州大学医学部で生体解剖実験が行われた。戦後「九州大学生体解剖事件」として、関係者が横浜で

のBC級裁判で罪に問われ、5人が死刑判決を受けている（のちに減刑）。

B29が墜落した場所には、今もその跡と思われる、えぐられた斜面（写真11）が残っているが、この土地の所有者が、その近くに1977年に地元有志とともに慰霊碑「殉空之碑」を立てている（写真10）。石碑には、熊本と大分で亡くなった米兵6名のほか、生体解剖の犠牲となった5名の米兵、さらに紫電改の乗務員であった粕谷欣三氏の名前も刻まれている。

NHKによる取材番組では、阿蘇で少年時代、米兵への憎しみを顕わにした村人の姿を見ていたという佐藤暢三さんらの証言を放映している。

2018年12月、筆者は「殉空之碑」を訪ねる機会を得た。竹田の街から車で15分ほどだが、農村から山間部に入っていくエリアにあり、車は現地まで入っていくのは難しく、駐車場も整備されていなかった。公共交通でのアクセスはほぼ不可能であろう。



写真10：殉空の碑（筆者撮影）



写真11：墜落機でえぐられた斜面（筆者撮影）



写真12：墜落現場の説明図（筆者撮影）

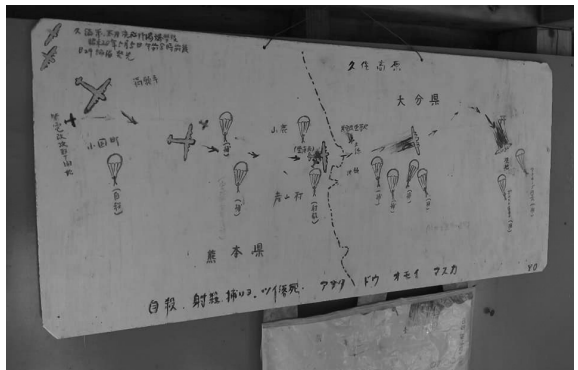


写真13：手書きの説明図（筆者撮影）

本州から空路で大分に向かう場合に、往路・復路のいずれかで福岡空港を利用するならば、福岡市東区の九州大学医学歴史館に立ち寄り、生体解剖事件について、現在九州大学がどのように受け止めているかを確認することもできる。歴史館全体では、九州大学医学部の歴史が展示されているが、その中で生体解剖事件についての展示が行われている。1948年8月の有罪判決を受けて、九州大学医学部教授会は、「反省と決意の会」を開催した。

職員、学生生徒、看護婦等の出席を求めたこの会では、「人間の生命及び身体の尊厳についての認識を一層深くするとともに、その天職をまもりぬくためには、たとえ国家の権力または軍部等の圧力があっても、絶対にこれに屈従しない」と決意したと記述されている。また、医学歴史館の開館を間近に控えたタイミングで、医学部教授会は新たな決議を行い、犠牲者に哀悼の意を示すとともに、医師としてのモラルと医学者としての研究倫理を再確認するとしている¹⁶⁾。

5. 海軍飛行場跡にコースを設定している宇佐市

大分県宇佐市は、全国の八幡宮の総本宮・宇佐神宮で知られる県北部の市である。宇佐市は、鶏肉の唐揚げ専門店「発祥」の地といわれ、「聖地」と称される中津市と並び、多くの唐揚げ専門店が軒を連ねている。この町にはかつて、海軍航空隊の飛行場があり、農村地帯の中にその遺構が多く残されている¹⁷⁾。宇佐市では、飛行場に関連する戦争遺構を訪ねる観光客を支援するアプリ「うさんぽナビ」を配布している¹⁸⁾。

宇佐海軍飛行場は、昭和14年に完成し、長さ1800メートルの滑走路が作られている。当初は、急降下爆撃などの訓練をしていたが、昭和20年に特攻基地となっている。一式陸上攻撃機に吊り下げられて運ばれ、切り離されたあと敵艦に体当たりする「桜花」も用いられた¹⁹⁾。

現在もっとも目を引くのは、田園地帯に点在している掩体壕だ。これらは飛行機を格納するために作られたが、農地などを接收したものであるため、多くは所有者にそのまま返却され、倉庫などとして利用されているという。ただ、そのうちの1つは、「城井一号掩体壕」として、宇佐の史跡に指定されている。周辺は公園として整備されている(写真14)。



写真14：城井一号掩体壕（筆者撮影）

掩体壕の周辺には、爆弾池、滑走路跡、耐弾式コンクリー

ト造建物、宇佐海軍航空隊落下傘整備所といった施設が点在しており、これらを歩いて見て回る間に、いくつか個人の所有物となり、農機具などが収納された掩体壕も目にするようになる。2020年3月の訪問では、ひととおり掩体壕周辺の建物を見終わったあと「宇佐空の郷」という名前の施設にたどりついた。この建物は、宇佐海軍航空隊の司令部庁舎をモチーフにしたもので、2017年4月に開館している。訪問時、内部では、周辺施設に関して解説する展示があり、観光ボランティアガイドの方が、展示内容について説明して

くださった。

また、城井一号掩体壕から数キロ離れた位置に、もう一つ宇佐市平和資料館がある。こちらもまた、宇佐海軍航空隊の歴史などを展示するために2013年に開館している。実物大模型として、零戦21型戦闘機と人間爆弾「桜花」が展示されている。

宇佐市は、飛行場跡の遺構がまとまって残っており、飛行場跡であるために、平地で移動もしやすい。アプリ「うさんぼナビ」では、自転車で戦争遺構をめぐることも想定して、コースが紹介されている。遺構についても、看板や展示内容の整備がかなり進んでいる。

おわりに

本稿では、大分県の観光について、「ダークツーリズム」に基づく独自の視点を獲得するために、大分県が推進する「おんせん県」そのものについては、あえて取り上げなかった。しかし温泉地は、表面的には明るいレジャーランドのようでも、さまざまな事情から温泉地で働くこととなった人々の事情など、多くの場合、負の側面、「悲しみの歴史」も内包している。大分の温泉とダークツーリズムの可能性については、今後さらに検討をすすめることとする。

また、2018年に新装改訂版が出版された、江浜明徳『九州の戦争遺跡』（海島社、2018年）には、九州の戦争遺跡が117ヶ所紹介されており、大分県だけでも20ヶ所ほどが掲載されている。その中で、宇佐海軍飛行場のように、アプリが戦争遺構の周遊コースを推奨するほどに、戦争遺構を整備している場所もあるが、その数はまだ少ないだろう。この状況の全体像についても今後さらに検討を行うことにする。

一方新型コロナウイルスの感染拡大は、マイクロツーリズムといわれる自宅から近い地域の観光をうながすことで、知られざる「ダークツーリズム」遺構への関心が生まれるきっかけともなった。また単に移動距離の問題だけでなく、個人で静かに旅をするような形も、定着していく可能性がある。

今後大分県が、現在の「ツーリズム戦略」をどのようにアップデートして、「With コロナ」に対応していくのか、注視しつつ、さらに検討を進めたい。

※本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）18K12000の助成を受けたものである。

註

- 1) 井出明「ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅」(幻冬舎新書、2018年)、104頁。
- 2) 本土決戦に向けて九州の人々がどのように戦争に巻き込まれていったかについては、最近も新たな資料の発見がある。たとえば、「(戦後75年)本土決戦、新聞が指南した九州で発行、「防衛新聞」見つかる」(朝日新聞デジタル) < <https://digital.asahi.com/articles/DA3S14587318.html> > (2021年1月25日確認)
- 3) 「日本一のおんせん県おおいたツーリズム戦略 (2019-2021)」(大分県ホームページ) < <https://www.pref.oita.jp/soshiki/14180/tu-rizumusennryaku2019.html> >
- 4) 制作にした大塚オーミ陶業による紹介記事。2015年3月に設置されている。JR大分駅北口駅前広場完成 | 陶板がお披露目されました | ニュース | 大塚オーミ陶業株式会社 < https://www.ohmi.co.jp/news/index.php?c=topics_view&pk=1466424099 > (2021年1月28日確認)
- 5) 大分市/南蛮文化発祥都市宣言 < <http://www.city.oita.oita.jp/o157/bunkasports/citypromotion/1392766963446.html> > (2021年1月28日確認)
- 6) カトリック大分司教区のウェブサイトが、詳しい説明ページを設けている。「キリシタン殉教記念公園 (葛木)」 < <https://oita-catholic.jp/publics/index/101/> >
- 7) 「人間魚雷「回天」大神訓練基地跡」(ひじまち観光情報公式サイト) < <https://hijinavi.com/spots/detail/7> > (2021年1月28日確認)
- 8) 台湾花蓮市で、特攻隊員の出発前の儀式が行われた、松園別館については、拙稿「台湾におけるダークツーリズム:「霧社事件」関連施設を中心に」敬和学園大学「研究紀要」第30号(2021年2月)で触れた。
- 9) 「日出殉教公園・日出藩成敗場跡地」(ひじまち観光情報公式サイト) < <https://hijinavi.com/spots/detail/25> >
加賀山親子の殉教についても、カトリック大分市教区のウェブサイトが詳しい解説を掲載している。「日出殉教公園 (加賀山親子の殉教)」 < <https://oita-catholic.jp/publics/index/99/> >
- 10) 「タケタン! 竹田市観光ツーリズム協会」 < <https://www.taketan.jp/> >
- 11) 長崎・天草の「潜伏キリシタン関連遺産」の登録をめぐる経緯については、松井圭介「潜伏キリシタンは何を語るか:—「長崎の教会群」をめぐる世界遺産登録とツーリズム—」地理空間 11(3), 76-90頁, 2018年、深見聡「『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』とダークツーリズム—ゲストとホストの邂逅の視点から」観光学評論 5巻2号 p. 185-196頁, 2017年。
- 12) 吉田勝重「竹田キリシタン資料館 洞窟礼拝堂をめぐる」佐伯史談 (236), 39-48頁, 2020年。
- 13) 「キリシタン洞窟礼拝堂」(おおいた遺産) < <http://oitaisan.com/heritage/> キリシタン洞窟礼拝堂 / > (2021年1月28日確認)
- 14) 藤丸警部の慰霊は現在も行われており、報道されている。「西南戦争で処刑、藤丸警部の冥福祈る 臼杵津久見署長ら」(大分 - 毎日新聞) < <https://mainichi.jp/articles/20200524/ddl/k44/040/135000c> > (2021年1月28日確認)
児玉潤子「藤丸宗造警部を悼む」佐伯史談 No.233, 56-61頁, 2018年。
三重野勝人「別府も戦場となった西南戦争(一八七七・二〜九)と大分県」別府史談 No.21, 57-82頁, 2008年。
- 15) 熊本側の阿蘇地方をNHKが取材したものととして『証言記録 市民たちの戦争] B 29 墜落 “敵兵” と遭遇した村 ~熊本県・阿蘇~』(2010年8月9日放送)。NHKの戦争証言アーカイブスで紹介されている。 < https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/bangumi/movie.cgi?das_id=D0001220041_00000 > (2021年1月28日確認)
ほか論文としては、藤井可「阿蘇地方の住民によるB29飛行兵殺傷事件に関する一考察」先端倫理研究:熊本大学倫理学研究室紀要第6巻, 49-63頁, 2012年。

- 16) 九州大学医学部生体解剖事件については、上坂冬子『生体解剖—九州大学医学部事件』(毎日新聞社、1980年)、熊野以素『九州大学生体解剖事件 70年目の真実』(岩波書店、2015年)などがある。また、当時医学生として手術に立ち会った東野利夫さんの証言は、放送でも取り上げられている。NHK「ETV 特集 “医師の罪”を背負いて～九大生体解剖事件～」(2015年12月12日(土)放送)
- 17) 江浜明德『九州の戦争遺跡』(新装改訂版、海鳥社、2018年)、170-171頁。
- 18) 宇佐市 うさんぼナビサポートサイト <<http://www.usanponavi.jp/support/>> (2021年1月28日確認)
- 19) 江浜前掲書、170頁。